

戦後50年記念平和事業

8月に何があった

一枚のはがき



1945・8・6 B-29広島に原爆投下

日野市中央公民館

戦後50年記念平和事業

一枚のはがき



はじめに

中央公民館では平成3年度から、『8月に何があった』と題し平和の貴さと戦争の悲惨さを訴えるために平和事業を続けてきました。

反戦映画の上映、講演会、戦争資料の展示など、年度ごとにさまざまな事業を実施してきましたが、戦争を体験した方々の生の声をなかなか聞けないのが現状でした。

戦争を体験した方々もすでに高齢に達しようとしている現在、生の声を収録し、後世に伝えることが私たちの使命であると判断し、平成6年度に「一枚のはがき」事業をおこないました。

これは、「聞き書き・日野の昭和史」冊子の作成を通じ、多くの方がなんらかの形で自分の体験を私たちに伝えたいという熱意・義務感をもっているということが感じられたためです。

話そうとしてもなかなか話し出せない、長い文章には書けない、自分の胸の奥深くにじっとしまっておきたい。しかし、惨劇の実体験者として後世に伝えてもいい。そんな相反する想いを、話し出すきっかけにと、「一枚のはがき」で身近な戦争体験を私たちに伝えてくださいと訴えたのです。

その結果80通を越える『一枚のはがき』が集まりました。そこには、学童疎開、空襲、原爆、さまざまな体験が生の声で綴られていました。

公民館では平成6年8月1日から31日まで、このはがきを展示し、多数の方々に見ていただきました。市内を始め近隣市、他県の多くの方々が公民館を訪れ観覧されました。

本年は終戦50年の区切りの年にあたります。このままはがきを埋もれさせてしまうのでは惜しい、と考え冊子にまとめることにしました。

編集にあたりましては、投稿された方々に承諾を得ました。原則として「はがき」の文面をそのまま写真製版しました。生のことばが、生の「はがき」が私たちにいろいろなことを訴えてきます。

はがきによっては読みやすいように次頁にワープロで打ったものを掲載しています。ワープロ打ちは原文に忠実にと心がけました。明らかな誤字脱字はご本人に了解のうえ公民館で訂正しました。

日本国憲法にうたっている通り、日本は、いや全人類は戦争を永遠に放棄しなければなりません。この小冊子が平和祈念のささやかな礎となるよう願ってやみません。

目次

第一章

戦争に卷込まれた人達は

伊藤 ゆき
五木田 哲夫
内田 光昭
小久保 節子

鎌田 邦夫
広瀬 真
中村 寿美子

熊本 みよき
廣橋 義雄
原島 福司

篠 重雄
小峰 覚
本多 ミツイ

第二章

空襲の体験

長井 まつ子
熊本 みよき
谷口 初栄
大久保 幹子
榎森 加寿枝
塚本 要
伊藤 ふじ子

松本 利夫
小松 義雄
廣橋 識子
岸野 識子
鍛代 重雄
篠 一
佐藤 枝

大久保 昭男
阪上 正枝
宮内 静夫
多田 潔子
市川 登
杉本 ミサ

大塚 フミ
清水 弘
村野 圭市
西村 俊子
関根 敦子
桑原 ぎん

第三章

学童疎開

佐藤 睦
中村 寿美子

北見 久子

阿部 悦子

田中 玉江

第四章

戦争の体験
↳入隊そして戦場↳

須藤 貞雄
武内 みよの
山田 絹次郎
岸野 隆毅
金家 識子
稔昌
山口 節雄
荻野 倉次
齋藤 俊光
後藤 輝一
古谷 正子
江野 一郎

第五章

原 爆 体 験

松本 季男
齋藤 俊光
金沢 須磨代
村田 美枝子

第六章

終戦↳そして

仲谷 虎之助
齋藤 俊光
笠原 文次
志村 昭子
栗林 哲子
中村 寿美子
鍛代 年子

第七章

封書・資料ほか

長屋 ひろ子
藤井 和子
金子 哲也
壺岐 よし子
内野 定年
佐藤 睦
齊藤 英子
土屋 由男

第一章

戦争に卷込まれた人達は

像
入
の
明 寝^{モニ}
は 付^{ツキ}
の
米
と
化
し

日野市

伊藤
ゆき

1942年私は小学5年生でした。太平洋戦争も2年がたち、南方諸島では米軍が反撃に転じた頃です。

算数の授業で『%』は敵国語であるから使用してはいけない、これからは『パーセント』と書くようにと先生から教えられた。ものぐさ少年のわたしは、後のテストで答案に%で書いた。先生から注意をうけた。%の方が書くのに速いし、カッコウ良いと内心想っていました。

次のテストで又%で書いた。今度は注意されたうえ零点にされた。それでなくても、出来の悪い少年であった私はかなりのショックを受けた。

半世紀もたった今、もの忘れが多くなってきたのに、私の脳細胞にはナゼカこのことがインプットされて消えることがない。

いつの時代にあつても子供の教育は、一部の権力者によって左右されることのないようにしたいものだ。

1994-8 私の戦争体験記

多摩平 鎌田 邦夫

戦争と食物



全寮生の学校で学んでいた。八百人の学生と
賄う苦勞はいかばかりであったとか。

校庭のスベリヒユを汁の実に

玄海灘の潮水を塩分とし

雑炊、すいとん・玄米御飯（大釜のせが

美味しく炊けていた）が現在のダイエット食より

もと少量並んでいた。泥水すすりササをかんて

いる兵隊さんを見て、ありがたく戴いた私共。

炒れた大豆やそら豆を家から送つてもうて大切に

五粒十粒を胃袋に入れてひもじくを凌いだ。

戦争と生命

夫（^{現在}67才）昭和20年8月15日に学生の

身で陸軍予備士官学校に入隊する
予定であったという。（当時18才）

人は二十二年!! わがいのち国に捧げむ

私（65才）全寮生の学校で学んでいた私は16才。

乙女の黒髪をバサリと切り取り親元に郵送した。

「もしもの事あっても祖国のためです」
と

親の心境は？



程久保 熊本 みよき

一つのトマト

まっかなおいしい日野のトマトを
いたたく時、私は、一つのトマトに泣いた
あの母子の姿を思い出したのです。

「お母ちゃん、トマト、トマト、トマト、トマト食べたいい、
ミオ位の女の子が、私共の引くりヤカーの箆の中、
トマトを見つけて母親にせかむ。若い母親は困つて
いまして遠慮しながら私共に頼む。この子の父親は
南方で戦っています。どうかトマトを一つわけてくだ
さい。私共は八百人の客は野老木の配給を戴き、い
福岡の西から東まで来ての帰りのこと、一俵の馬鈴薯と
一箆のトマトを「これだけなの」と思いつく路上の馬糞を
拾いながら……。上級生の「これは私の一存は上げられない。
皆の物だから」の言葉に女の子は泣き、母親も涙する。
トマト一つも自由にならなかった戦事中のまっかな食料不足。

程久保 熊本 みよき

戦争と子どもたち

「お父さんが出征しておられる子どもたちは
たいしに守ってあげようね」先はおとな
たちもそうだった。出征軍人の家は名譽とされ
「お兄さんい召集令状がきた」といふ子は
とくいげであつた。戦争ごっこ、看護婦さん
ごっこをした。農繁期には学童の小さい子で
勤勞奉仕といふ稲かりに行った。
「勝つまではほしかりません」と作文に書いた。
帰還兵を迎えた喜び、戦死の報せをうけた悲しみは子ども心にも
しっかりとひびいた。

程久保 熊本 みよき

私が中学生の頃は戦争が激しくなり学徒動員令が下り、学徒動員報国隊の名のもとに巨鷹市の工場へ動員されて働きました。当時大きい工場は軍機密のこの皇国才〇〇〇〇工場靖国才〇〇〇〇工場と数字で呼称していました。吉祥寺の駅周辺は強制疎南のちび互石炭の山でした。通勤のための路線バスは女性の運転手さんで木造自動車のための時々エンストで停車しこのような時は乗客が降車してバスの後部を後押しするような有様です。

物資が不足して通勤のための運動靴が買えないため荒削りの木製サンダルで工場へ通いました。昼食は労務加配米という制度の給食があり、ご飯の中には大豆がきり位混入していて副食は毎日塩辛い切り昆布の佃煮で、この中には砂が混入しているような粗悪品でしたが当時は食物にありつければ幸でしたので皆一粒も残さず頂きました。歯磨粉も歯ブラシも石けんも数多くも売っていませんでした。

「欲しがりません勝つまでは」と言う標語がありました。

1ヶ月に2回学校へ登校日があり教科書ではなく太い木の枝を持って行き藁人形相手に関東平野へ敵国敵前上陸のための訓練でした。どう戦争はこりごりです。次の世代の子供等にこのような生活をさせないために語り継ぎ書き残していかなければなりません。

多摩市 篠 重雄

終戦の年私は十七才。海軍省人事局に勤務。毎日士官名簿と首引き。それはB4判よりやや小さく厚さ25センチの極秘書類。これを四冊にし、一頁に十名位准士官から大將まで網羅。横須賀や呉など鎮守府発行の公報にもとりまき加筆。〇〇中將はこの司令部にいるか、××少尉はこの飛行隊等、加筆するのが役目。戦死は赤ペンで抹消、次々消える將校。どんな人か。遺族はー考えるひま無し。戦争程残酷なものなし。軍規は編み官品は持ち出され、これで勝てるだろうかと内心思ったが口に出したう手が腰にまわつてしまふ。現代の平和は尊い犠牲者のおかげだ。

東村山市

五木田

哲夫

戦後四十九年を経た今でも当時のことは断片的ながらも私の記憶には
 鮮明に残されています。父が入隊後、母方の実家所沢に母、妹と共に身
 を寄せていました。終戦時私は四歳でしたが、焼夷弾が夜空を焦がして
 バリバリと降るたびに私は終戦後間もなく除隊してきました。板前であつた父
 は内地にいた父は終戦後間もなく除隊してきました。父の生れ故郷東北の片田舎にと戦
 後疎開することになりました。当時父と母は国交通もなく三里の夜道を私
 も必死に歩いたものになりました。その後父と母は苦しい中にも耕した畑か
 た土地を開墾して働きました。その後父と母は苦しい中にも耕した畑か
 ら茄子や胡瓜、ジャガ芋、とうもろこしなどが実つたときの連続でした。
 の笑顔を毎日でも思い起こさねば。父は収入を得るため山に入つて炭を
 焼き、毎日もせと木を切り夜間には炭窯の番をしたりの連続でした。
 小学生の私は父の焼いた炭を背負つて山を下りたことも度々ありました。
 母は都会育ちの人で炭を背負つて山を下りたことも度々ありました。
 米を傾けてもらつたために自分の持ち物だつた衣装なども次々と交換して
 家計を賄つていたように思ひます。また、山間に建てた小さな家で井
 戸もなく、小川の水を天秤を担いで百メートルもの道を風呂や飲料水に
 毎日汲んでいたものでした。私たちが手伝いました。そんな無理がたつたのでし
 の重さは今でも実感として残っています。そんな無理がたつたのでし
 ようか、母は若くして病でこの世を去つてしまいました。

霞ヶ浦上空をB29爆撃機がトンボ程の大きさで飛行機雲を尾に
引き下り偵察飛行中日本の零戦が追跡飛行してました。
高度速度とも仲々追いつかないので、くやしさに地壇踏み下り
を援観戦してました。地上からも高射砲の援軍発砲が始
まりました。砲弾の破裂火もB29機のはるか下にあること
が地上で見えてはつきり分ります。「ダメだ、届かない!!」
「ソッ!!」間もなく一機に火が吹き隊士落態勢「ヤッタ!!」
「おや!!」歓声も束の間、見えなくなったのは翌日に「日の丸」では
ありませんか。味方東ち。これらや戦争は勝てない、
と思いつく、誰も口に出して言う人はいませんでした。
敗戦も同近の要隘のような一コマでした。
今では、
この飛行空に鎮座を黙ってあるのみです。

狛江市 広瀬 真

戦争は誰でも衣食住に苦しんだでしょう、2度も焼け出された上食料もまゝならず、工場の寮生であつた私達の食事は朝はゴハン粒を捜すくらいに混ざり物の多いお粥で味噌汁といえばただの塩汁で実は胡瓜が大根の葉である、昼の弁当と言えば大豆の煎ったのならまだ良いが油を搾って潰れた豆粕を来客用の茶のみ茶碗一杯焙烙で煎ったのを紙に包み上着のポケットへ弁当ばこなどいりません。朝出勤途中でポケットに手を入れて工場に着くころは全部食べてしましてお昼に困つたこと度々である。毎日空腹であつた考えることは如何に食べ物を調達するかそればかりでした。恋? そんなこと考える暇などなかった飢えた満十四才の徴用工の少年でした、あれから四十九年いまは六十三才。国の為とはいえ文句一つ言わず命令に従つていた無知というか素直? と言うか今はとても受入れられないことである。今の十四・五才の少年には想像着かないでしょうね、平和とは本当に幸せである何時までも今の平和を。

栄町 廣橋 義雄

一斤の食パン

昭和十九年二月当時旧制中学四年生明け方の三時起床
防寒身支度を整へ朝六時に配られる食パン購入引換券
を手に入れるたの池袋東口駅前通りの靴十のパン屋へ
急ぎ足でかけつけた外はしんと寒く二時前半待って
やっと手に入れた嬉しき家に帰り母に券を渡すのを
つい忘れ登校し書庫でしまいました。

その日は一年一回全校生がうける陸軍省検査の教練が
赤羽の秋葉原駅のあけく居残りのやり直した方五時には
何回も繰返しのありく居残りのやり直した方五時には
引換券を携えてパン屋に行かず無駄となり帰宅するや
あや母の平手叩を喰らう一斤の食パンのため
情けないやら悔しやら今でも忘れることが
できません。

南 平 小 峰 覚

昭和19年一私の国民学校5年生の時のことでした。
家のハキダメの中をすてたカボチャの種から自然に発芽して
いつのまにかつるを伸ばしそばの木の垣根からハツエ
黄色の花も咲かせやがて人間の拳ぐらいい実をつけたし
めを吹でした
やせあつた。油けのない半匁のカボチャをそれといつ手どかし
たのかわからないような一色面ピンしたらしあがしめてい
るが、戦後の古い布地でつくったモノパとて4でたが、
1はすばからず、秋にはどこか品物を生とないよわせた。第
一人が家へ来て私の祖母は「またこれあつたまい、いりてか
まカボチャいんばけいようか」と言うのです。祖母は
「そんなのでよかつたらどうもあもろい」と言つて家へ
入り、改めて家でとれた大玉のカボチャを一つもつて来て
一糸無の夫人にもちてあげました。夫人は涙を流し
て「ありがとうございます。これで家族三人が又いざ日か
生そのびるゝとができます」と祖母に涙を流して、い
んどもいんども探してくれと去つてゐた。
あとで祖母が「あの奥さんの2人、あはさへんと言つて
どつちがたがた、いつとめかたがたあはさへんたんで
やね、ええカタイ司令の人の上いつとめかたがたでやま
てきないで家族の人が苦労してゐるやね。幸
ひね、おつたていんか、富をやつてゐるからどうにかい
るそのは家族の分にはまがたつて子か、ゆゑ、あつた
だ。あんないい世かたなら、いんば奥さんのネー」と
てのいもまじりにお話ししてくれました。平素の平素
高風高潔として並れた生活ゆゑ、人々ハキダ
メ、さへ、口には実の入らないカボチャをありがたく
思う、日常は、一まつて、あいてない時代でした。

(以下略)

多摩平

内田 光昭

昭和十九年―私が国民学校五年生の時のことでした。家のハキダメの中にすてたカボチャの種から自然に発芽して、いつのまにかつるを伸ばし、そばの桧の垣根にからみつき黄色の花を咲かせ、やがて人間の拳ぐらゐの実をつけはじめた頃でした。やせおとろえ、油けのない半白のカミの毛、それもいつとかしたのかわからないうなゝを両ビンにたらし、顔にはどこかはいるが材質のよい布地でつくったモンペをはき、チビたゲタをはきながら、顔にはどか品の良さをたゞよわせた老婦人が寄つて来て、私の祖母に「まことにあつかましいのです。が、このカボチャいたゞけないでしようか」というのです。祖母は「こんなのでよかったです。どうぞおもちなさい」と言つて家へ入り、改めて家でとれた大きなカボチャを一つ持つてきて、一緒に夫人に持たせてあげました。夫人は涙を流して「ありがとうございます。これで家族三人がまたいく日か生きのびることができます」と祖母に深く頭を下げて、いくども深く礼を言つて去つていった。あとで祖母が「あの奥さんのご主人はSさんと云つて、どこか立派な官庁に勤めるかなりのおえらいさんなんだがね。元々カタイ性分の人の上に勤めの関係でヤミができないで家族の人が苦労しているらしいね。幸い家は私がこうやっていくらか畠をやっているから、どうにかたべるものは家族の分位はまかなつてゐるからね。可愛そうだよ。あんな、いい世が世なら上品な生活ができる人が、ハキダメから生えたロクに実のした。平常時なら高級官僚として立派な生活ができる人が、ハキダメから生えたロクに実の入らないカボチャをありがたく思う日常生活―まったくあじけない時代でした。あの夏の日から五〇年、半世紀を経た今の時代にはとても考えられない事です。飽食の時代、物のありがたさ、度をすぎると元への反復、いつかきつと反対の五〇年前のような時がくると思えてなりません。夏になり、カボチャの出まわる時期になると、私の中によみがえる苦しかった時代の強烈な思い出です。

多摩平

内田 光昭

暑い夏の正午殊南光の静岡県富士宮市で迎えた終戦
 は小学校三年生だった。ラニオの前で大人は皆泣いて、
 が戦争が終ったという意味も解らぬ。私の戦争は
 その後の食糧難だった。東京へ戻り配給生活だった。
 即飯に混ぜ物(大豆、ごま油、大根、大根葉、大豆のみ)は上々で
 大根、大根葉、雑草が入った水のような雑炊、すいとん。
 すいとんもふすま(小麦のぬか)に上玉程な小麦粉を入れた
 赤黒い糊だった。米のぬかは一茶匙、くわい、よとめ
 フライパンで焼きたたか、カサく、はい、わらう、ぼく、喉を通
 りにくいものだった。さつまいも、かぼちやの茎、そして、
 すずかつたトコイモ(王さまいも)の芽を取った後のぬけ、
 煮ても焼いてもカリく、臭く、それでも食った。母も
 母の幼い時代の小学校三年の子の農家(行王トコイモ)も
 はい、すから、分けて下といと買って来た。いも、す、
 の犬、吠えられ、悲しい思いの買出しだった。

程久保

中村

寿美子

暑い夏の正午、疎開先の静岡県富士宮市で迎えた終戦は、小学校三年生でした。ラジオの前で大人は皆泣いてましたが、戦争が終わったという意味も解らぬまま、私の戦争はその後の食糧難でした。東京へ戻り配給生活でしたが、御飯に混ぜ物（大豆、さつまいも、大根、大根葉、大豆かす）は上々で大根、大根葉、雑草が入った水のような雑炊、すいとん。すいとんもふすま（小麦のぬか）にすぎ程度小麦粉を入れた赤黒い物でした。米のぬかは一度煎ってからまとめフライパンで焼きましたが、カサカサでいがらっぽく、喉に通りにくいものでした。さつまいもやかぼちゃの茎、そして何よりまずかったトコイモ（さつまいもの芽を取った後のぬけがらのいも）、煮ても焼いてもガリガリで臭く、それでも食べました。母子家庭で母が働いていたので、小学三年の子が農家へ行きトコイモでもいいですから分けて下さいと買って来たいものです。放し飼いの犬に吠えられ、恐ろしい思いの買い出しでした。

どん底生活

「ましがりません勝つ迄」と合言葉に一九三八年（昭十三）四月公布された国家総動員法に骨子は軍需品優先で物もなく金もない三度の飯も万足に食ひきれないを食糧のどん底生活の毎日であつた。その理由は一九三一年（昭六）九月満洲事変に突つた翌年一月には第一次上海事変、一九三九年（昭十四）九月第二次支那大戦勃発、第二次上海事変（昭十六）十一月太平洋戦争と次から次の危機態勢に、一九四二年（昭十七）十二月大平洋戦争と次から次の危機態勢に、アメリカ映画上映禁止に入り小中学校が国民学校と改称され学徒出陣おひたされ一九四四年（昭十九）には米軍空襲にう激化翌年八月広島長崎に原子爆弾投下され一九四五年九月日本軍降伏終戦の敗北となつた。戦争とは人知れこつて勝つて負けるも得はない事。日本国民は二度と軍需品にたよりないよう教育する者なり。

どん底生活

「ほしがりません」勝つ迄は、を合い言葉に一九三八（昭十三）四月公布された国家総動員令の骨子は、軍需品優先で物もなく、金もない、三度の飯も満足にたべられない、乞食同様のどん底生活の毎日であった。その理由は一九三一（昭六）九月満州事変勃発、翌年一月には第一次上海事変、一九三九（昭十四）九月第二次世界大戦勃発等、更に一九四一（昭十六）十二月太平洋戦争と次から次の戦時態勢は増大して、アメリカ映画上映禁止に入り、小学校が国民学校と改称され学徒出陣まで行われたが、一九四四（昭十九）には米軍空しゅう激化、翌年八月広島、長崎に原子爆弾投下され、一九四五年八月日本軍降伏、終戦の敗北となった。戦争とは人類のころしつこで勝って負けても得はない筈。日本国民は、二度と軍事大国にならないよう切望する者です。

日野 原島 福司

主人が昭和18年7月24.6才の子役と
残し召集され、まもなく南方の戦地に向
きました。戦時中の女世帯の生活は
今に思ふ大変なものでした。
毎日の生活は育児・食糧の調達等
月の廻る様な忙しさをしました。
その頃、男が離散し期で、トウモロコシ
入りの配給米でのおかゆで、お腹
をこわし、今の花輪病院の院長
さんに大変な世話になりました。
ある日農家の庭先の真赤な柿の实
を子供達がみつけて、欲しがり
分けて貰い、いそお集りしましたが、あ
なく、迷われ、淋しく帰ったことを、
秋になると思い出されます。
昭和21年主人が仕事帰り、不自由
な戦後を全て一同暮らしております
戦時中に雑糧等を口会で、お返しを
思い、外米等、お返しと育ち、いそお
で、お返しを、お返しを。

旭が丘 本多 ミツイ

主人が昭和18年7月、2、4、6才の子供を残し召集され、まもなく南方の戦地に向いました。戦時中の女世帯の生活は今に思うと大変なことでした。

毎日の生活は育児・食糧の調達等目の廻る様な忙しさでした。その頃二男が離乳期で、トウモロコシ入りの配給米でのおかゆでお腹をこわし、今の花輪病院の院長さんに大変お世話になりました。ある日、農家の庭先の真赤な柿の実を子供達がみつけて欲しがり、分けて貰いたいとお願いしましたが、むべなく断られ淋しく帰ったことなど、秋になると思い出されます。

昭和21年主人が無事帰り、不自由な戦後を経て、一同暮らしております。戦時中に雑草等を喰べたことを思えば、外米等もっと有難くいただくべきと思います。

此戦へ行かれし中絶りてわれはけり多しの
 未采あり若今つばめが下敷く行つた
 ふれからやせに終つた現在よりその
 思ふと胸の痛み
 おがき大義なる今かふらうと戦ふは天
 あくはなうないしす戦ふこととす
 一風化さざるはそし語らば之を度ふ
 戦ふのそい平和なふらうとす
 そい戦ふは胸の痛む日本にふらうとす
 見合ふこととす思ふうのいふ
 思ふやうにやうな量かな日本にふらうとす
 とに希むとす

(平成六年八月 胃 浮夜記)

東平山 小久保 節子

私が子どもの頃住んでいた那覇市の家の右隣りは那覇医院歯科部の金城先生のお宅でした。男の子供さんがたくさんおられ、みな秀才でした。その頃小学生だった四男の三四郎ちゃんをよく家に遊びに来て、トンチのきいたことを言って皆を笑わせていました。長男の初男さんは、みずから詩を作る長身の文学青年でした。戦争が激しくなり学童疎開が始まりました。五男の光男ちゃんの乗った「対馬丸」が米軍の魚雷にやられ沈んでしまいました。目の大きなまつ毛の長い美しい少年でした。沖縄二中の生徒になっていた三四郎ちゃんは「鉄血勤皇隊」の一員として戦死。沖縄一中の教師をしていた初男さんは一中の「鉄血勤皇隊」と共に戦死。男の子が三人も戦争の犠牲となりました。女子師範、一高女の「ひめゆり隊」二高女の「白梅隊」、日本で唯一地上戦の行われた沖縄で、どれだけ多くの未来ある若い命がつばみのまま散って行ったことでしょう。あれから半世紀経った現在でも、そのことを思うと胸が痛みます。

いかなる大義名分があろうとも、戦争は決してあってはならないことです。戦争を過去のこゝとして風化させるのではなく語り伝え、二度とふたたび戦争のない平和日本であってほしいものです。そして、現在の物の豊かな日本にあって、単に自分のことをのみ思うのではなく、他の人のことも思いやる心と、また豊かな日本であってほしいと切に希むものです。

第二章

空襲の体験

征く義兄と産着の幼児抱く姉と親子三人
撮つた一枚

敗戦の戸太の海やぼんやりと座の向日葵また夏に來ぬ

兵千鳥歌をくれと言ひし義兄凜々しき春先の白き衣

春遠し又巡り來ぬ寒橋この道義兄は征きしあまなり

悲慘跡忘れ去りゆく公園に証のこゝとく小き碑の立つ

西平山 長井 まつ子

短歌

生きた還り、山に着きたる焼跡に
我を待ちゐるしは五つみ仏

あか^{うから}族いづべに死にし橋あれば橋の袂
の墓碑覗き見つ

生きたあるもの比白死にてあかかねの露仏
何すとも焼地醜草

戦後を引きづって四十五年、悲しみに生きた夫の
沢山の短歌の中から。反戦の意をこめて。

八王子市

松本

愛

敗戦の前年、東京大塚の西巣鴨小六年生だった
私は空襲の危険を避けて長野県木村の禪達院へ
学童集団疎開。家族は水々の田舎へ。父は東京の
会社へ残って高ければなれの生活。寂しくて悲しくていつも
お腹をすかせていて、小さい頃に食べたおいしかったお菓子
を思い出してはナッツも飲み込みながらにもジサを我慢した
毎日でした。敗戦の年の四月の東京大空襲で大塚の家は
焼失。近所の人は焼夷弾と油脂爆弾の猛火の中を逃げ
まどい、山手線の線路の西側の排水溝の中へ避難した人達も
熱風と煙に巻かれて大多數の人々が焼死したと聞いております。
飢餓と恐怖の戦争体験はもうこりこりむす。子や孫のために
も平和な世界を創りあげようために微力ながらもこれから余生を
捧げて参りたいと念願していますこの頃です。

日野本町

大久保

昭男

私は下町今の錦糸町の駅の所三月九日火の中を
くぐつて深川凡が強くて橋が渡れなかつたのはつて渡り
すに馬がたくさん逃げつてしまひ親子バツカンを目の
前で見ました川でたくさんたぐつてゐる氷がなくて
食物もたぐふで三日で前橋に兄がおりますとび
けました八日五日前橋で又池のそばに逃げたのを
木丸がたぐふ集つて明くなつてまいるとその時に
木丸をにくうしく思つた事はあります

多摩平

大塚 フミ

空襲衣体験

—死守せむとおもひし
字舎も灰燼に

いきなりの空襲敬言報のサイレレに驚い
ろえとび起きる。敬言戒敬言報もなしに。

昭和20年6月19日夜就寝中

「待避!!」のあと「点検」の声はきかれなかつた。

数多の焼夷弾の攻撃手に若き子は等も
なすすへもなかつた。菜種の燃えさかる中を

無我夢中して走り川いとおひこんだ。

福岡女師範の本校、附属小学校、寄宿舎は

全焼した。空襲の大火で大釜の米が炊けていた。
涙と共にのみこんだ。

程久保 熊本 みよき

昭和20年4月13日。私の家は都内豊島区の大塚仲町に在り。そこを近隣の旧制中学に通つていた。そして山の千一帯を一夜にして焼野原と化したあの空襲襲にめつたのだ。あの夜の事はもう50年にする現在、未だにありありと目に映ってくる。逃げ之行く光々の事物が一瞬、炎に包まれる。その中をめろゆるものが火の鬼火にたつてお形が、すぐ前を走っていた人が倒れる!。電柱すねかと思ふがりの低空を走るB-29!。悲鳴。本さびしい轟音!。紙けり合ふは、叫び声!!。そして一夜明けた市街の惨状は、とてもこゝに書ける事のおまけに凄惨なものであり、よくこの中を生き残れたと改めて痛感したものだ。戦後50年とへた現在、平和の有難さを感ずるのは、この年のおまけと体験した事によって尚切実である。今尚、戦っている一部の国を思うと心が痛い。一とたび戦争といふのは、傷つてのは戦い切要員だけでいいのだ。犠牲にける。

今改めて、もちろん取りざたされているが、日本は憲法九条と云うすばらしいものを、絶対守つて、欲しいものだ。

多摩平 小松 利夫

その日は朝から波状的なB29の空襲で防空壕に入ったきりでした。夜になつてB29は照明弾と共に大量の焼夷弾を投下、町のあちうこちうからは火の手が上がり、時折爆弾が投下された。うしろの物すごい地ひびきも南こえて来ました。年老いた姑と二人火の粉を払い除けながら、近々の多度川の河原迄生き、た心地もなくやつと、思いでたどり着きました。河原の草からも所々炎が上がつていきました。私はもうこゝで戦地に行つてゐる夫との再会も無いと、覚悟を決めたのを八月十五日の終戦記念日が来る度、思い出します。私の叔父も神戸で空襲のため命をおとし、した。戦争は絶対反対です。

石田 阪上 正枝

昭和20年7月8日(日) その日は義勇隊結成式
があり、学校から帰還、空襲警報(なり)に
友人と二人で足早に国立駅へ向かっていた。
午後三時頃(なり)にうか、突然小型機三機
が松達をわけて急降下。ババババババ
と機銃掃射をあびせてきた。
幸い眼下前に国立駅があり、その駅直下
とわかんない。タスは駅舎(木造)に散走うろ
こめられていた。そーその中の一発がわかん
ない。今の松は無い。(14才空襲被害の頃である)

八王子市

清水

弘

ウウウー

警戒警報のサイレンに起こされ

枕元の服を手探りで着る

身の回り品を入れたリュックを背負い

防空ズキンをかぶって

庭の防空壕へ飛び込む

カビ臭く蒸し暑い防空壕の中で

蚊に刺されながら二度目のサイレンを聞く

空襲警報発令！

編隊を組んで敵機が悠々と低空を飛んでいく

どうか爆弾が落ちてきませんようにと祈るのみ

八歳の夏

こんなことが幾夜続いただろうか

眠い 眠い 眠い

もう死んでもいいから布団の上で眠りたいよー

日 野 谷 口 初 栄

昭和二十年五月二十四日夜半何時もながらの警戒警報のサイレン目を覚ますと窓の外はすでに真っ赤上空はB二十九から落とされた焼夷弾の花へ燃えかすゝが一杯ヒラヒラとおちていた。猛火で消すところではない、危険である工場の警防課長がおまえ達若い徴用工はこれからの国を守る人間である怪我をしない様逃げるよう命令がおりた五反田の御殿山方面に逃げた、朝になると警防課長は特高？に逮捕された我々を逃がした罪で国賊としてらしい、敗戦となり解放されてきたが痩せて歩けない状態で即入院虐待と栄養失調で間もなく他界したこれも戦争犠牲者の一人でしょう。二十五日は芝区芝園橋（現港区）近くの寮へ移るがその夜再び空襲にあい着いている物以外全部焼失二日続きの罹災でも誰も助けてくれない裸でも働かされる非常時である。これが戦争というものか、いかなることがあっても戦争はいけない。十四才の時である、あれから四十九年あの八月十五日は太陽がギラギラと暑い一日でした。

栄町 廣橋 義雄

昭和20年(終戦の年)私は群馬県前橋市内に住んでおり、国民学校(今の
の六年生でした。当時は既にアメリカ空軍による日本本土への空襲が毎日で
前橋市周辺へも殆ど毎日、偵察機が飛来、学校(着くと向もなく
、警戒警報発令し帰宅するという毎日でした。夜になると、乾パン・水筒等の
入ったリュックサックを背負い郊外への避難の繰返でした。

八月五日の夜、四機以上が飛来、前橋市や殆どが焼けてしまいました。
リュックを背負って避難の焼夷弾の雨と大型爆弾の炸裂する中、
必死に逃げた私も今でも憶えています。

翌朝、空をみると、炎天下の一面の焼野原に黒焦げの死体が散らばって
おり、失隊を遂げた機に集めて所付けていたと、また、市の中央部
を流れた荒瀬川も水ぶくれした死体が流れていたと何と紙に
悲惨な情景が今もありありと脳裏に蘇つてきます。

日 野 宮内 静夫

日野坂の空中戦——体当りでB29を撃墜

昭和20年1月9日午後2時ごろ、国民学校六学年の私は父と二人で、製板屑を積んだりヤカーを日野坂に押し上げていた。その時、空襲警報のサイレンが鳴り響き、B29一機が西から歪み、試験場日野桑園の方角へ飛んでいく。そのまわりには、アンミ箔の小片のような激撃戦機がひらひらとまつわりついていた。快晴であった。しばらくの戦いの後、突然、後下方から一機が翼のつけ根に突っ込んだ。体当りした。B29は翼と胴体に空中分解して墜落する。体当り機もまた……。すると、落下物の一つは傘を開き天高く舞い上っていくように見えた。体当り機の搭乗員高山少尉であること後年知った。しかも彼は、同月27日、再びB29を富士山上空で迎撃、ついに帰らなかつた、という。生年23歳。一機は目撃した父は、昨年七回忌を迎えた。

(注)年月日と高山少尉の名は、新聞紙上で知ったと記憶します。現在、その資料も見つかっていません。B29の搭乗員の埋葬地は国立駒の地方でした。

八王子市 村野 圭市

前略私が女学校三年の時に、学徒動員になり
 或る工場に行きました。空襲解除になり、もう
 大丈夫と思つて、一機の飛行機が、此の空
 と近づき、機関銃で撃ちました。他の学校の生徒
 の横腹に当たり、出血大出血で七人死にました。
 同い年の子でした。当時世田谷に住んで居て東條
 さんの下の屋敷が近くに、有つたので焼夷弾が良く
 落ちてきました。夏も野菜もやけ食べ物も、少なく
 皆やせていました。終戦後、友達と銀座に行こう
 と、そのまゝかはる都電が甘みの向こうを走ってしまつた。
 廻りは追駐軍の、カボこの兵舎が並びはるが、ねの垣根
 が張りめぐられてしまつた。神田は見え渡り、限りなく燃や
 しては、その服を着た人達が、黙々と歩き回っていました。

旭が丘

大久保

幹子

東京版「ナガエミクリ」・佐藤富治郎 画

昭和二十年三月十日朝、帰京する

ために駅へ行き、まず江戸東京は

明り方、空襲あり、たのでお茶の水

から先は無理に駅員さんに言はれたが

本所病院で働いておりましたので

いける所と云い、汽車にのりお茶の水で下車し

それから先は歩い一面の焼野原の中へを病院へ

途中防空壕の中へ、黒焦の死体を運び出した。

いる所や隅田川では赤坂を買った死体や、何体もの
死体がおののく死に、行か、まさに地獄絵その
ものだった



東京版「ナガエミクリ」・佐藤富治郎 画

秋川市

岸野 識子

昭和十九年に結婚して私共は翌二十年再度の百俵木へ夫が出征
するに当たり、東京も空襲が度々あるようになった時、私は妊娠
五ヶ月でいた。実家のあつち名手具の金右衛門に疎開することに
しました。夫もお腹の中の子を見ることが出来なく出征することに
をあげて泣き、私も遠くの別れともなりかねない悲しみで一晩中泣
きあがりました。二人の顔も知らず長男も無事生れましたが、戦局
は漸く悪くなり、昭和二十年七月十四日、釜石市は制鉄所があるの
で激しい艦砲射撃にみまわれました。実家も焼けて、防空壕は
壊滅し、土砂に埋まりました。やはり祖界して実家に戻る居た姉と
その娘はその防空壕の中で圧死しました。母は父も彼も焼けて、土と
居る道も無い焼野原の壕と素手で掘り姉を助けようとしてしま
した。アメリカ軍の砲弾と、艦載機の銃撃に逃げまどう人々は誰一人
として助けはくれませんでした。生れたばかりの私の子も煙にまかれ大砲の丸
におびえ泣きつづけて、七くなりました。母の指は骨が見えてしま
い、一月後終戦です。やりきれない思いです。大半の人々も大半の物もなくな
り、

落川 多田 潔子

暑中。お是、新中へいりまゐり。作證を仰へて、戻りまゐり。
 学徒動員で兵庫県の伊丹の軍需工場へハクマキに毛ニペ染つ
 飾りつけられた。親えかう高小寮生活での食事は米つきの殆ど
 入ってない大豆に梅干、夜は決然服に身をかため枕之に非常袋と
 靴を揃へ押入れの中の金をかいるに足らずに悩まされ、何屋もの襪履
 のカインに安眠どころわけなく、夜室を赤く染めた。B29の大坂大空襲
 は未だに憶裏にやまいて離れまゐる。ある日敵機のカウマンが
 低空飛行で機銃掃射をほいめ、畑に身を伏せ、頭上にアメリカ兵
 の笑顔に命懸けにうなづいた。向もなく兄が特攻隊で戦死の公報
 が入り、終戦五十年になりまゐるが、十代で散った兄の事は一生と心づかれ
 まゐる。

終戦日、いまも学徒のまゐりの兄

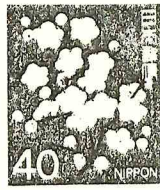
俊子

程久保 西村 俊子

平成元年の此の夏の猛暑を四十八年までのつゆ友の招きで別荘の
避暑に、その中で何故か空襲襲撃や終戦の頃の話かはじまった。
今迄ふれなかつた話題で始め、各々お恐ろしい体験をいそぎを
知った。私は廿二校二年生では徒動員され、阿佐ヶ谷の陸軍
音楽隊で軍の通信の仕事をして、ゆが十三才であった。
昭和二十年五月二十五日空襲の夜は天を一面照明弾で照らし
出され、いつもの様に防空壕に入らねば、私と一才の末弟を刀貝だ
母は数回米先の中野警署署者に走った。途中、弟のよどみ掛に
火の粉が落ちて「フク」と叫ぶ赤子に防空用水の水をかけた。後にも
先にもたつた一枚となるセーターを脱ぎ、焼夷弾の建物の右手、左手
に下、前後とふり落ちる度に火の手が上り、ズルズルと叫ぶ音か
うつろいていた。署員や防空団の人々の手で懸命に打ち消
されるのをみる二十年を合せて見た。朝が来て玄關へ出ると、瀕死
の人々や死体の山があった。隣組の人々を率いて、郡長の父が焼
野原の我が家跡で私達を迎えてくれて始めて後が来た。その頃、学童

郵便はがき

191-□□



市民公民館

以中

日野市日野町

七ノ五ノ三

町田市 榎森 加寿枝

疎開にやられていた今頃は
 亡き中の二人の弟達に
 栄養食欠調で目丈
 干口つめ、腹を異様に
 ふくらませ、手足は骨と
 皮丈で八月の終戦の後、実
 態へ帰って来た、能く思
 います
 出を乞われる事か
 とうとう出来たろうか
 二とこんな話を私に
 誰にもしなう
 平和な世に還るに
 三年もすぎたに
 平和の日々に感謝するばかり
 毎日新聞をみて

194

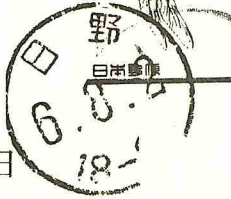
終戦は日野一六の六年生。敬言報発令と同時に各部
落毎に全学年が二列に並んで甲州街道を必死の
思いで下校した。オリエントの寮、菜園の蚕室も
教室とした。

四月四日の戦災の事五百米先の下河原東町が
照明弾で昼間の様になり爆弾投下の様子を大声を
上げ、泣きながら見た事と当夜伊勢原から都内に
荷物を運んだ馬が二頭自宅の両横につなかれ
居り、「火を見え、粟刈に出すと大変だからヨテ川に
逃げろ」と云うのを口論で止めた様だった。

馬が大人しかったのと翌朝馬の足許に数個以上の
銃

郵便はがき

191-□□



日野市日野本町
七一五一二三
日野市中央公民館
一枚のハガキ係
御中

破片が落ちた
のに無事だったの
が今も不思議で
脳裏から消えず
せん

以享

日野 鍛代 年子

毎年八月十五日が来ると戦争を思へ出してなうな。日米開戦
と同時に日米と戦争もはげしくなり国民皆兵で国をあげ
た。戦争一色となつた軍需工場には学徒動員中年者
は全部徴用として工場にかり出された。家には防空壕か
堀をあつて空襲の度に壕に子供を手わけしておいた。飛
びこんだ家や近所にも bombe 爆弾が三ヶ落とされ二名の
方が犠牲となつた。改めて復興を申し上げる横姿
の空襲の時は B 29 40 機末襲した青空高く銀色
に光つて飛んできた。姿が今のまふなり底にうか
んで来る人類生存のため世界平和のため二度と
戦争をおこさないよう願ふやまない

宮

市川

登

警報に起こされて 防空ごうの入口から空を見
上げた時、きうめく星の向をぬって、火を吹して
走る流れ星の集団を見た。それは、次から次へ
右も左も、真上から……川に落ちた玉ほすい
くと泳いで消えることにはなかった。
小学一年の弟をべちよべちよにぬうた夏布団
でしるんで、その手を引いて 防空ごうとび出し
たのは、中学三年の兄だった。
明け方の薄明かりの中で、家族を呼び合う声か
うがあまり燃える街の残リ火がところどころで
まだ火をふいていった。和が中学一年の夏のこと
である。その数日後、学校で呼び集められて行
った。集団踏台では、小学三年の教室で、一枚の毛布で寝た。
サツメンその果の向から米粒がふうふうの音で
炊か常食だった。東京からは田舎とソウ
れ、土佐の音。

多摩平

関根

敦子

「悪いしかつたあのと女中の事

昭和20年2月当時私は群馬の(現在16号線の群馬橋梁架設)戸川の河原で、少年飛行兵に在るためのグライダの訓練を受けており毎日教官からきびしい教育を受けており来りた。毎日森から約10キロの道の道を歩いて通っており訓練が始まるとき、まっただ中に「空しう警報が発表され訓練は中止となりすぐに家に帰るよう命令され当時私は16号線の国道は橋脚がけ設けられそのそばに小さな木製の橋が架けられておれは渡りかき木に降り私にはソツモのように本製の橋を渡り途中まで来たとき突然爆音と共に南の方から適機が来ると降ってきて来て「機いようしや」をして来りた。私は深さ橋脚の脇にかくれて適機の去るのをじっと待っておりまいたが次から次へと戦中戦は南から北の空川飛行場の方に飛んで行くが、いよいよして解がはるり爆音とくるるり通りおきたようでも足がかくかくいて歩くと来りた来りたせん下りたこれは艦載機のP51グラマンで、本場に命をとりつきました。今は平和な日々を大空に去るにやまず

昭和20年、当時私は阿佐谷駅北側に
住んでいました。

ボーイングB29爆撃機による焼夷弾の無差別爆撃ではなく軍需工場への高高度から精密爆撃が目的だった昭和20年1月9日午後この頃の東京は空気が汚れてなく真青に澄み渡った冬空でした。

ボーイングB29の編隊が東京上空へ飛来し機体が銀色で青白く光って見えました。B29の周辺には日本陸軍の高射砲の弾幕が張りめぐらされ、そこを突如として空位位の黒い雲が現れました。すると火の球となって肉光が走り黒い雲は落ちて行きました。

これこそ才の震天制空隊（首都防衛のためボーイングB29に3体当りする特攻隊）才の戦隊隊長の幸万壽美陸軍軍曹でした。ボーイングB29の前方より体当りした外方エンジンを吹き飛ばしてボーイングB29は白い煙を噴いて墜落していき、日本軍機は体当りのため木々葉微塵です。幸万壽美軍曹の胴体（遺体の一部）が10,000メートルの上空から杉並区本天沼の関東バス乗車の裏に落下し、木々が弾って私等はお線香をたむけたとを覚えていす。以上は私が実際に目撃したこと、東京上空が戦場だったのです。今の少年に話して信用してくれませう。二度と戦争をさせないために体験談を記しました。

多摩市 篠 重雄

昭和20年四月三日夜から早朝にかけての
 空襲警報の音は、山の中腹に横た
 った防衛壕があり、その中へ2925の壕
 壕が直撃した。方々四方へ、空襲警報
 うばい、私はその時三才の弟を皆
 負に照明弾投下で昼間。よるは明
 々の中を、司馬に向って走って、走
 途中に機銃。底空射撃を繰り返
 回わす。二年に敵はにたり。此月半
 に大のあつた。いかに、新こいまし
 時々、空が落ちて、いるかと、死を、ぬき
 ました。空を、恐ろしくした。で、よる、
 此月半にす。いかに、身体を、く、動
 ち、せ、い、て、走る。途中、右に行けば、山中、取
 左に行けば、番堀、坂に、出、合、い、また、私、は
 何。考へ、ま、だ、く、左、を、え、う、が、ま、し、た
 そ、い、今、私、も、空、を、生、か、て、い、ま、す、で、も
 三、れ、を、運、命、と、い、て、か、た、ず、け、て、い、い、
 で、し、も、か、そ、い、て、戦、争、の、終、り、と、も
 と、心、で、は、い、つ、も、せ、ん
 空、に、空、襲、の、記、録、を、持、て、い、ま、す、誰、か、は

昭和三年八月二日(木)日記より。

夜半、新鶴見・川崎方面と長岡市の
空襲が解除されておつた。川崎方面は、
敵の敵機、富士山方面より侵入してあり、
警報が終るぬ中に、富士山

市石川方面に火の手があたり、
屋敷から予告されて、八丁空襲と

日野自動車社定員仲民の大部令は、
「さうさ家」にたきつた。し、
西之原、村の中にも、
甲州街道と葛巻で

つた。その途中、日野自動車神戶精工
エ辺にたきつた。焼夷弾が散り
アチコチで焼える。林の中、
防衛隊にとどいた。焼夷弾は、
まわりは暗かった。

石川方面からの中へ、
市、團りから攻撃されて、
忽ち市、全体が、
海に落ちて、
その火を、
おろした。焼夷弾が、
決して、
たきつた。

同僚・親友を見舞つた。
街は、
白い灰の中に、
土花と、
大木、
焼けた
残りか、
ぼろぼろと、
残っていた。

日野自動車社に
戦後、
市内から、
進駐して来た。

(時)日野自動車社定住居、主婦(三女)

日野 桑原 ぎん

昭和二十年八月二日（木）の日記より。夜半前、鶴見・川崎方面と長岡市の第一波が解除されてホッとする間もなく、B 29空襲の第二波を告げるラジオが「敵B 29数機富士山方面より侵入しつゝあり」の警報が終らぬ内に、先ず八王子市石川方面に火の手が上がり「昼の内から予告されていた」八王子空襲となる。日野自動車の杜宅の住民の大部分は、遠方「タイヒ」をしたまま。私は身軽なことで、家にいた。急いで小西六裏の林の中にと、甲州街道を夢中で渡った。その途中、日野自動車、神戸精工辺にも投弾した焼夷弾が散り、アチコチで燃え上がる。林の中の防空壕に飛び込んだ頃は、まわりは暗かった。石川方面からの火の手は、市の周りから攻撃されてか、忽ち市全体が火の海となって、その上を次から次とB 29が金色に飛び廻る様が、決して忘れられない。「同僚・親友を見舞った時の八王子の街は、白い灰の中に土蔵と大木の焼け残りが、ポツンポツンと残っていた。」にくい程計画的な米国は、日野自動車社に終戦後間もなく進駐して来た。

（当時、日野自工第一社宅住居の主婦 二十五才）

日野 桑原 ぎん

昭和二十年三月十日の東京大空襲に
 夜は明けて江戸土に任んた義母が日
 野山に我が家へ立ち寄り着て一人着
 の義母の家はニコウイ弾で燃あれた
 るを早く貰ひの当時は終戦の折に
 衣を食共にするがやわらかい米の配
 給に大根の千切り、さつま、もろゝの
 込みごはん、幼息二人には、主人の着物を直し
 上つぱりして着せし
 東部軍管区情報部敵機は相模湾を
 北上中………ラゴの報道を聞
 家族全員が防空ゴウに参る

(以下略)

日野台

伊藤 ふじ子

昭和二十年三月十日の東京大空シユウの夜は明けて、江東区に住んでいた義母が日野台の我が家にたどり着き、一人暮しの義母の家はシヨウイ弾で焼かれた事を聞く。其の当時から終戦後暫く衣食共に事かき、わずかのお米の配給に大根の千切り、さつまいもなどのたき込みごはん、幼児二人には主人の着物を直し、上っぱりにして着せた。東部軍管区情報、敵機は相模湾を北上中…。ラジオの報道を聞き、家族全員が防空ゴウに急ぐ。敗戦になり、悲惨な体験をし現代の世を迎えるとは…。戦争は嫌い。永久に平和であります様に。

日野台 伊藤 ふじ子

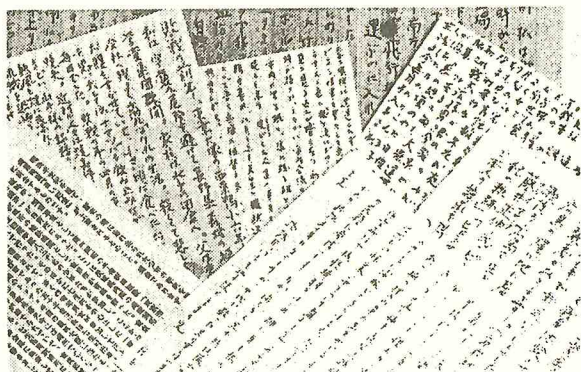
昭和十九年頃から、アッツ島ガダルカナルの玉砕が民間にも噂となって流布していった。相変らず軍は勝ち戦を宣伝していたけれど……。自由ヶ丘の先の奥沢に住んでいた庭に防空壕を掘って、目星いものを入れていたけれど、一夜の豪雨で水浸しとなった。横浜までは東横線で三十分も走るのに、横浜大空襲の日は二階の窓から手にとる様に空襲をうけて燃え上がる様が見え、この距離も物かわその爆弾の落ちる音は百雷の落つる如く恐怖に戦いた。空は真赤に焼けてボンボン燃える。自由ヶ丘の方からは、黒こげのねまき姿のまま人々が逃げてくる。庭から見るとまるで花火の様に焼夷弾が降りそそいだけれど、あれは何処に落ちたのかしら？。翌日子供をオンブして自由ヶ丘にいつて見ると、米店のあとらしき場所で、米が山の様にブツブツと燃えていた。あ、何と恐ろしい日々であった事よ。今までの沢山の美しい晴着は着る処か、モンペに地下タビでバケツをもって夜毎暗いまちまちを走り廻った。食料は庭の花々を掘り返して野菜を植えた。街では米よこせ騒動である。役所の上役の私宅には米俵が運び込まれた。カンヅメまで。

栄町
佐藤 一枝

戦争を知らない世代へ はがき一枚の伝言...

日野市中央公民館が募集

戦争体験者から日野市中央公民館に寄せられたはがきの数々



「戦争を知らない世代のために、一枚のはがきを贈って下さい」。日野市日野本町の市中央公民館が「身近な戦争体験を語り継ぐ」と戦争体験展を募集

している。集められたはがきは、六日から十六日まで公民館に展示され、数多く集まれば記録集を作る予定にしている。

や写真展、本の展示など、戦争と平和を考える企画展を開いており、今回の企画もその一つ。戦後生まれの世代が大半を占める中で「あまた知られていない身近にあった戦争の現実を伝えたい」との願いから募集。

企画を担当している公民館職員佐藤雅夫さんは「短歌でも俳句でも絵でも構わないから、ぜひ今回の企画を、戦争を語るきっかけにしたい」と応募を呼びかけている。

同公民館はこのほか、星空映画会(6日19時半)▽戦時食試食会(13日10時)▽公開講座・日野の空襲体験(同)▽反戦映画「上海」上映会(14日13時)などのイベントを企画している。はがきは〒191日野市日野本町7の5の3市中央公民館(0425・81・7580)へ。

これまでに寄せられたはがきは約十五枚。自らの空襲体験と特攻隊で戦った兄の事を書いたものや夫が招集され乳飲み子を抱えて戦中戦後生き抜いた女性の証、学徒動員され租界で行くドラマ仕を作られた女学生の話など、それぞれのはがきに戦争への思いが込められている。戦地から来た兄のはがきを出した人もい

(毎日新聞多摩版より)

第三章

学童疎開

学童集団疎開日誌より

昭和十九年九月二十六日(火)晴

（疎開十日目）

今日午後一時から東葛城校で
紹介式が行なわれた。向かいの
生徒さん方は私達と疎開く
と云うて見物にくる。向かいの
代表の方と私達の代表がじ(辞
と讀まれた。校長先生の御挨拶
があった。皆さんがお友さんお母
さんのぬいざもとと離れて田舎へ来
たのも、この大東亞戦争に勝つ
爲です。此方へ来て少しは寮
生活になれた事と思ひま
すが、何分不自由な事ゆえ、わか

る人事は、田舎のお友達の
に聞き、又田舎のお友達の、
さういふ風にたがいに助けあつてい
くことが大切です。あつた方はもう
東葛城校の生徒、又先生は東
葛城校の先生として、これからミ
で勉強に運動に勵んで下さい。
大体このやうなことをおつやつた。
歸りに東葛城校の生徒さんが
作られた「カボチャ」を十程、お土
産にいただいた。これもただのカ
ボチャではなく、皆さんの暖かい
氣持がこもつてゐると思ふとも
つた。いなくてたまらなかつた。
(大阪・住吉國民學校 五年生)

立川市

佐藤

睦

學童集團踈開日誌より

昭和十九年十月十三日(金)晴

一(第二十六日目)

午前中寮で勉強をした。
算数と讀方だった。座敷に
すわろするのだ。昔の寺小屋
のやうだ。今も椅子にこしか
けてやろ居たので少々きゆうく
な気がする。
午後から學子校へ行った。
地理とフットボールを拵る行つた
が残念な事に運動場は
兵隊さん方の爲に使はれて居た
のでドツヤは出きさうでなかつた。

地理とすまゝ上りの運動場
に行く見たがそこも生徒
さん方が武道で使う居た
とうくドツヤとせずに歸寮
した。
お三時に茅がゆと柿を頂いた。
茅がゆなんぐス(ぶりだ。
その後家庭への通信を書いた
夕食は電燈がついてゐた
ので暗くて陰氣な気が
した。やがて明るく方が
朗らかな気がする。

(大阪住吉國民學校五年生)

立川市

佐藤

睦

學童疎開 日誌より

昭和十九年十月二十二日(日)晴

(第三十五日目)

今日から靖國神社臨時大祭が始まる。新しくお祭される靈燈は二萬百九十七柱だ。

晝から半日遠足をした。今日は

十名も休む。道端には美しい花が

咲きみだれてゐた。私達は夢中になつ

て列から外でながうつんだ。色づいた

美しい落葉もたくさん拾つた。行けば

行くほどだんく静かになつて行く。

葛城山の登山口迄行つて引きかへした

その時私は感激した事があつた。

七十四歳のやばあさんがこれから葛城山

を越えて和歌山縣の端の方にある自分の

家へ歸られる姿をみた。しかも大きな

牛を引いて。そのおばあさんの息子

さん方は兵隊に行つてゐるさうだ。

それで自分も働いてゐるのだ。これ

から十町の道をまわくといふので行く

やばあさんのことを思ふと私達は取っ

たつた一里歩きへなれた。居るやうなこ

はだかだ。やはり町の三侯はよいとてく

思つた。

や八つは分教場であつた。やあか

がすいておたふとともやいしかつた。

やにぎり二つとあつても二きれ。しやう

三きれ。けうかうなや八つだ。

歸りはやんだーと思ふ程近いやう

がふれがいた。

夕食後先生からあせつ教を聞かされ

た。それは此頃私達がふれまうたに

つてきたからだつた。(住吉校 五年生)

立川市 佐藤 睦

私は東京(浅草)生まれ。思ひのなため、親族会議の結果、

国民学校五年生の夏、学童疎開(仙台秋保温泉)に行かされることになり、今思ひしても淋しい悲しい辛いことのや、母もいとはあても無きこととはなかつた様に思ひます。その様な時に、今は亡き昭和天皇より子供達に

つぎのよとせおうべきみそたくさ〜

た〜のびよさ〜にうたりて

とのお教(作曲者はわかりません)と菊の御紋のお菓子(たしから〜かんぱちと思ひます)を賜り、お菓子等な時代でもあり子供ながらに感激致し、今でも心の底に残る所があります。

幸い私も孤児にならず、現在三人の孫に恵まれ、幸せを感じて居ります。何時迄も平和な世の中が続く様願ひて居ります。よくと恵みあさる今日この頃です。乱筆乱文にて失礼致します。

多摩平

北見 久子

遠い昔にさうした。私が小学校二年生のとき
戦争が始まり六年生の時に終戦となり、
学校から長野県に集団疎開したのみ、しらが
たかたか何年もつらかったのは空腹で、
親とのわかれも子どもとして何にも増して淋しくつら
く悲しいものでした。疎開先で男の子の捉まえてくれた
蛇を食へたり。親恋しさの余り脱走までしました。
毎年の夏のプールで想い出しますが、真新しい水着で
学校のプールで楽しく泳いだのは一年生のとき、たった
一度だけでした。二年生からは空襲に備えての防
火用水により濁った水の中でたぐよんのボウラが泳いでいました。

多摩市

阿部 悦子

空襲警報の音で目をさますと、夜空はもう赤だった。飛び交うB29から焼夷弾がバラバラと落ちてくる。母にせかれ近くの貯水池へ

避難した。田りの建物の窓からは火が吹き出していた。火の粉をかぶり

逃げ場を求める人たちが次々とやつてきて、貯水池は直ぐにいっぱいになった。悪夢の一夜が明けると全てが焼け野原となった。学校を失った私たちは長野県に学童疎開をした。五十人程の生徒たちは疎開先のお寺

から学校まで一時間以上、毎日歩いて通った。お風呂は殆んど入れず、小川で身体を洗った。夕食用のジャガイモは自分の鉛筆削りの

小刀で皮を剥かなければならなかった。当時七才、最年少の私は一級生

や強い子供に食事をとられいつもひもじかった。終戦の日を迎えて

から四ヶ月間が経ちようやく東京に戻ったが相変わらず食糧不足だった。

食糧はいつもさつまいもの粉で作ったまっ黒なまんじゅうのようなものだった。

飽食の現代、喉もと過ぎればさびしきで、つい忘れてしまふが、これを戦後に

心を引きしめようと改めて思う。

終戦の一年前、小学校四年生から集団疎開
へ、私は小学二年生だったのが、秋田の祖母の家一
五才の妹と縁故疎開しうた。
母子家庭だった為、母は会社勤めとして東京の
池上に住んでうた。連日の空襲で母も引当
さう云われ、会社から静岡へ転勤命令で
母子三人静岡へ移り住みうた。
その一週間後、池上の家は空襲で焼けた。
そう云う。母の決心が一週間遅くして、
いたう五才と七才の私達姉妹は孤児
なうと云うところでした。

程久保

中村

寿美子